

発声指導を用いた幼児の表現活動におけるコンピテンスと 感性的表現力の向上の取り組み — 4歳児への第1回目の指導とその考察 —

長 川 慶

岐阜聖徳学園大学短期大学部

Efforts to improve competence and emotional expressiveness in
preschool children's presentation activities through singing instruction:
The first instruction and consideration for 4-year-old children

Kei NAGAKAWA

キーワード：発声指導 幼児 領域表現 歌唱 頭声

I. はじめに（問題の所在と研究背景）

現在、保育現場では、盛んに歌唱活動がおこなわれている。歌唱は、道具を必要とせず場所も選ばない原初的な表現行為である。他の領域とのかかわりや教育の歴史の観点などからも、幼児期の教育の根幹をなす活動の一つと考える。筆者は、2016年から現在までおこなっている保育現場でのフィールドワークを通じて、歌唱活動が園生活と密接に結びつき、保育にとって重要な役割を果たしていることを確認した。しかし、歌唱活動での子どもの歌声はどなり声に近いことも多く、改善の必要を感じた。

どなり声での歌唱は、主に3つの問題を内包している（図1）。幼児のどなり声での歌唱については、先行研究も多くあり、一見議論が尽くされた問題に見える。しかし、発声指導法という技術的な側面から問題をとらえると、研究者の論文や領域表現の専門書で異なる知見が散見される。さらには、教育要領等では発声についての言及がなく、統一された見解が示されているとはいえない（図2）。つまり、幼児教育の分野では、音楽的な技術指導（以下、歌唱指導という）面の方針および基準の整備が遅れており¹⁾、新しい歌唱指導方法の開発が急務なのである。そこで、上記の問題を背景として、2019年4月から2021年3月までを予定として、歌唱指導方法の開発プロジェクトをスタートさせた。プロジェクトでは、以下の2点を主要な目標とし、より現場に即した実用的な歌唱指導メソッドの開発を目指す。

- ① 幼児の身体的・精神的発達に留意し、子どもにとって無理のない歌唱指導とすること
- ② 保育者が高度な声楽や音楽の知識がなくても活用できる実践的なメソッドを構築すること

本稿では、2019年6月より実施している保育現場での指導法開発のための研究授業の中から、第1回目の年中児の実践について考察する。年中児を取り上げる理由は、頭声発声を覚え、思いのままに歌うことから、より美しい歌声や豊かな表現を求めて、子ども自身が探求をはじめめる年齢と位置づけているからである。

II. 研究方法

1. 研究の全体構想

本プロジェクトでは、研究を第1フェーズ、第2フェーズに分けて実施する。第1フェーズでは、発声指導方法の開発をおこない、指導方法のメソッドを構築する。第2フェーズでは、新しい歌唱指導方法での指導を受けた子どもが、表現活動にどのように取り組んでいくかを、歌唱活動中の行動や発言などから探る予定としている。

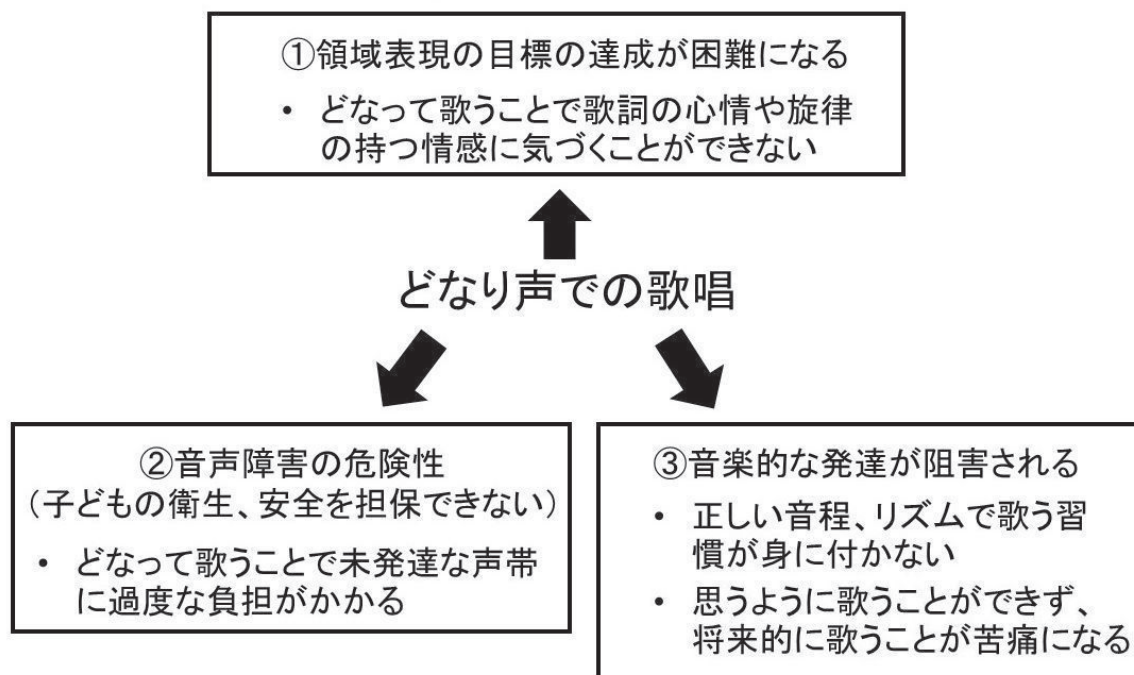


図 1 どなり声での歌唱の問題点

2. 今回の研究の取り組みと位置づけ

現在は、第1フェーズの歌唱指導のメソッドを構築している段階である。実際の指導は2019年6月に開始し、現在も継続中である。メソッドの構築については、より実用的なものとするために、幼稚園で子どもたちに実際に歌唱指導をしながら開発をおこなっている。また、現場での利用しやすさという観点から、幼稚園教諭の参画を得て、指導案および指導実施後の評価・検討をおこなっている。子どもたちへの実際の指導については、下記の手順で実施している。

(1) 指導案 (PDCA)

- ① 筆者（研究者）が指導計画を立案 (Plan)
- ② 立案した指導計画に沿って幼児への指導を実施 (Do)
- ③ 実際に行った指導について、協力園の教員とともに点検、評価し検討 (Check)
- ④ 検討結果を基礎資料として、指導計画を改善 (Action)

(2) 子どもたちへの指導

- ① 筆者（研究者）が指導計画に従って実施 (PDCA : ①)
- ② 実施した指導を検討、検証 (PDCA : ②～④)
- ③ 幼稚園側の複数の教員が行い、音楽を専門としない保育者でも実施可能かどうかを確認し、判断 (③については第2フェーズで実施予定)

Ⅲ. 第1回指導実践の計画と概要

1. 第1フェーズ第1段階での指導計画と考え方

第1フェーズでは、歌唱指導方法を構築する。歌唱指導方法で要となるのが、発声方法の確立である。発声方法の指導は、どなり声に近い歌声を解消し、美しい歌声や思い描く表現を実現させていく最も直接的な手段である。

本研究では、発声方法については、裏声を中心とした頭声発声を採用している。頭声発声は、裏声を中心に歌声を作っていくため、歌声と話し声の区別が容易となる。また、大きな歌声を求めてもどなり

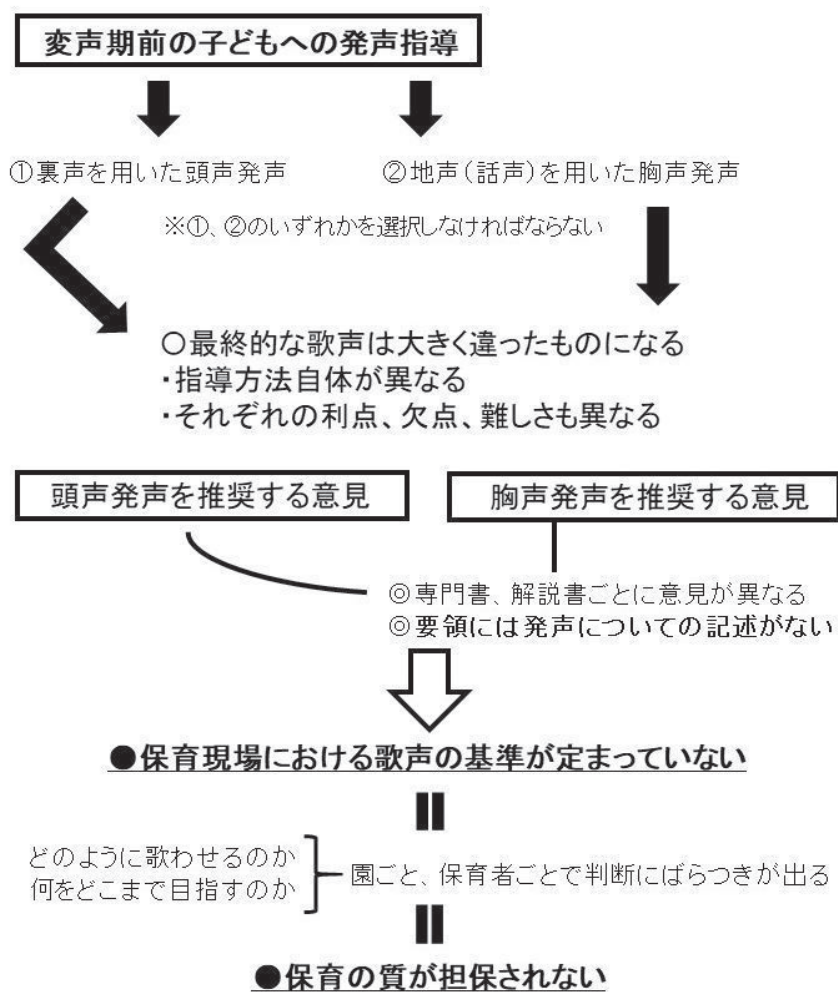


図2 現状の音楽的技術指導の問題点

声になりにくいことや、響きが同質になりやすく、美しさや一体感を感じやすいなど、利点が多いからである²⁾。

頭声発声には利点が多いが、同時に指導にも工夫が必要となる。通常出すことのない裏声を子どもたちに認識させ、それをどのように歌唱につなげていくのが課題となる。さらに、裏声を使えるのは一定の音域（個人差があるが幼児の場合はDo⁵程度）より上の音からであり、それより低い音については、胸声（地声）を使わなければならない。現在の幼児が歌う楽曲では、頭声だけで歌える曲はなく、1曲の中で胸声と頭声の切り替えをおこなわなければならない。筆者の指導経験では、小学生はすぐにこの感覚をつかめるが、実験的に幼児へおこなった歌唱指導では、この部分が難しいことがわかった³⁾。

したがって、第1フェーズでは、上記の問題を解決すべく、以下の項目を主軸に指導を実施することとした。

- ① 裏声の概念（声の出し方）をつかむことができる
- ② 裏声を用いて、響きのある声と、大きな声の違いを認識することができる
- ③ 裏声で歌唱することができる
- ④ 胸声、頭声それぞれで歌唱することができる
- ⑤ 胸声、頭声を切り替えながら歌唱することができる
- ⑥ 胸声、頭声それぞれである程度ねらった音程で歌唱することができる
- ⑦ 上記すべての項目を、子どもたちにとって楽しい活動（＝遊び）となるよう実施する

（１）第１回目の指導の概要

第１回目の指導は、重点協力園として参画を得ている岐阜県内のA幼稚園およびB幼稚園（両園とも私立）で実施した。実施の詳細は以下の通りである。なお、重点協力園の２園とも、本研究の開始前に、音楽専門の外部講師などによる特別な音楽活動はおこなっていなかった。

①A幼稚園

- ・実施日時：2019年５月28日 10：00～10：20
- ・実施形態：学年全員への一斉指導
- ・人数：51名

②B幼稚園

- ・実施日時：2019年６月４日 10：00～11：10
- ・実施形態：クラスごとの指導（年中３クラス×３回）
- ・人数：クラスⅠ 22名 Ⅱ 22名 Ⅲ 23名

（２）第１回目の指導の計画と考え方

第１回目の指導においては、裏声の概念を知る活動をおこなうべく、指導案を作成した。普段使うことのない裏声を認識させることは、特に幼児にとっては、口頭で説明をしたり、保育者が手本を示すだけでは理解することが難しいと考えた。よって、自然に裏声が出せる動作や行為に置き換え、指導する方法を採用した。

第１回目の指導では、ねらいを「いろいろな声の種類があることに気付く」とした。裏声を含め、話し声以外のいろいろな声に“出会う”ためである。さらに第１回目であるため、子どもにとって“楽しい＝遊び”活動となるように、特に配慮して計画を作成した。“楽しい＝遊び”はすべての活動を通じたキーワードではあるが、子どもと本研究のファーストコンタクトが“楽しい”ものであることは、今後の子どもたちの興味、関心、意欲を保持していくため特に重要であると考えたからである。

具体的な方法としては、動物の模倣、特に鳴き声の模倣を通じて、裏声の習得（本時については体験）を目指すこととした。活動は、動物園に行き、動物になる構成とし、動物園には汽車で向かうこととした。さらに、B幼稚園での指導では、汽笛の真似も取り入れ、活動のすべての時間に裏声を出す機会を設けた。

指導案は表１の通りである。ただし、紙面の関係で、本稿ではB幼稚園の指導案のみ掲載する。掲載の指導案は、A幼稚園での指導実施後、同幼稚園の教職員の評価・検討を経たうえで作成したものである。

表１ ４歳児指導案（B幼稚園）

子どもの活動	保育者の援助・留意点
<ul style="list-style-type: none"> ● 動物園を思い描く ● 動物園にはどんな動物がいるか考える 	<ul style="list-style-type: none"> ● 動物園に行ったことがあるか尋ねる ● その時にどんな動物がいたか尋ねる ● 今日動物園に行ってみよう子どもたちに提案する ● 汽笛の笛（トレインホイッスル；図３）を出し、何か尋ねる ● 笛であることを伝え、実際に吹き、何の音が尋ねる ● 汽笛の音を真似できるか尋ねる
<ul style="list-style-type: none"> ● 汽笛の音を声で真似する ● 列車の隊形（一列）になる 	
<ul style="list-style-type: none"> ● 「線路は続くよどこまでも」に合わせて動物園に向かう 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「線路は続くよどこまでも」を弾く

子どもの活動	保育者の援助・留意点
<ul style="list-style-type: none"> ● 見つけた動物をたくさん答える ● 保育者の質問に答えて、いろいろな動物の鳴きまねをする ● 保育者の質問に答えて、いろいろな動物の動きを真似する ● 指名された子どもは、みんなの前で鳴きまねや、動きのお手本をする ● お手本を真似て、みんなで同じ動きをする ● 保育者の指示に従って、動物の鳴きまねをする。指名された子どもは、何の動物の鳴きまねかを答える ● 「線路は続くよどこまでも」をルール1に従い行進する ● わらべ歌を歌う（わらべ歌；譜例1） <p>汽笛“ポッポー”の声でわらべ歌を歌う</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 「動物園に着きました。どんな動物がいるかな？」と、改めて尋ねる ● 子どもの答えを聞いてから、「どんな鳴き声が聞こえるかな？」と尋ねる ● 「その動物はどんな動きをしているかな？」と尋ねる ● 上手な子どもを見つけ、お手本になってもらう ● 「今の（鳴きまね）（動き）をみんなでやってみよう」と提案する ● 何人かの子どもを選び、後ろを向かせる。他の子どもたちに鳴き声を真似させ、後ろを向いている子どもたちに、何の動物かを当てさせる ● 動物を答える子どもをランダムに変えながら、活動が続ける ● 時間（夕方）になったので、幼稚園に戻ることを伝える ● 帰りの汽車も、汽笛を鳴らしていくが、各駅停車の汽車なので時々止まる（停車する）ことを伝え、停車のルール（※1）を伝える <p>※1 音楽が途中で止まったら、停車の合図で、その場ですぐに止まる。音楽が再開したら、また動き出す</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「線路は続くよどこまでも」をルール（※1）に従い弾く。その際、汽笛が疎かにならないように注意する ● 教室に到着したら、夕方になったので「ゆうやけこやけ」（わらべ歌；譜例1）を歌おうと提案する ● 汽笛“ポッポー”の声（裏声）で歌うように指示する



譜例1 わらべ歌「ゆうやけこやけ」

IV. 考察

1. A 幼稚園での実施について

(1) 筆者のリフレクション

指導は、まず子どもたちが列車になり、動物園に向かうところからスタートした。動物園に向かう列車は、ゲームの要素を取り入れ“途中で止まる列車”とした。“途中で止まる列車”とは、筆者の弾く「線路は続くよどこまでも」に合わせて行進し、途中で音楽が止まったら行進をやめ、音楽が再開したらまた行進を始める、というルールである。“途中で止まる列車”は、ゲームを通じて楽しい活動とすることと同時に、音楽に耳を澄まし、音楽に合わせて即時に反応するという音楽の基礎的な能力を養う目的もあった。子どもたちは行進をスムーズにおこなうことができ、ルールに起因する混乱もなかった。また、楽しそうに行進をしていた。

動物園の活動では、猫、犬、ゾウ、ゴリラ、ライオンの5種類のイラストを見せ、それぞれの動物を認識させた。イラストを一人の子どもに見せ、その動物の動きや鳴き声の真似をしてもらい、何の真似をしたのか、他の子どもたちが当てる（またはみんなの真似を一人の子どもが当てる）クイズをおこなった。しかし、ゲームの要素が強すぎ、子どもが声を出す肝心の場面が少なかったことは、大きな反省点である。この点は、「②教職員からのリフレクション」でも指摘があった。さらに、これも教職員から挙げられたが、動物の真似となると、子どもたちは動きの真似が中心となってしまう、もっと鳴き声に集中して活動する必要があると感じた。

しかしながら、本時のねらいである裏声を出すことについては、概ね達成できたと考える。特に、ゾウの鳴きまねを通じて、頭声発声につなげられる裏声が出ることが確認できた。また、ゴリラの真似を通じては、のどが開いた状態での発声になることがわかった。ゴリラの真似は胸声でおこなったが、なんらかの形で裏声と組み合わせれば響きのある裏声が出せるのではないかと予測できた。今後の展開への足掛かりの一つを得たと考えている。

(2) 教職員からのリフレクション

- 乗り物に乗って動物園へ行き、動物になりきって声を出すという内容は子どもたちにもわかりやすかった。
- 動物当てっこクイズ・なりきり遊びのゲーム感が強く、子どもたちの声を出す場面が少なかった。
- 鳴きまねごっこで、先生の真似をして声を出すなどの活動があってもよかった。
- 慣れてこないと2つのこと（ex. 動物の物まねと鳴きまね）はできないので、今回は鳴きまねのみにしてもよかった。



図3 トレインホイッスル：機関車の汽笛の音が鳴る

2. B 幼稚園での実施について

(1) 筆者のリフレクション

B 幼稚園では、A 幼稚園での実施後の評価や検討を経て、指導案の改善をおこなった。

導入では、B 幼稚園においては、トレインホイッスルを活用することとした。トレインホイッスル（図3）は、“ポッポー”という機関車の汽笛の音が出る笛である。A 幼稚園でも活動に使用したが、その音を1、2回聞かせる程度であった。B 幼稚園では、トレインホイッスルの音高が高めであることに着目し、子どもたちに真似をさせることで、裏声を出す良い機会となると考えた。B 幼稚園では、列車

の活動前に笛を子どもたちに示し、音を聴かせ、興味を持たせることから始めた。そして汽笛の真似を練習した後、汽笛の真似をしながら行進することとした。なお、A幼稚園と同様に、ここに“途中で止まる列車”の活動を付け加えてしまうと、本旨の前の活動が複雑になりすぎることが懸念されたため、途中で止まる活動は行わず、中断なしで行進させることとした。

実際の活動では、子どもたちはトレインホイッスルの音に非常に興味を示し、喜んで真似をしていた。汽笛の真似の練習では、裏声もスムーズに出せていたと感じた。行進では、列の先頭の保育者（クラス担任）が合図を出したら汽笛の真似をするように指示したものの、できた子どもは半分から3分の1程度であった。A幼稚園の教員からの意見にもあったが、子どもは、最初から2つのことを同時におこなうことは難しく、1つの活動からはじめ、徐々に増やしていく必要があることがわかった。

動物の活動については、A幼稚園での反省を踏まえて、「どんな鳴き声か」「どんな鳴き声か知っているか」「みんなで鳴きまねをしてみよう」など、鳴き声が活動の中心となるように質問の設定に配慮した。また、動物のカードをフラッシュカードのように素早く見せ、カードを見たらその動物の鳴きまねをすることも取り入れた。この方法では、ランダムに速いテンポでカードを見せることで、“次に何の動物が出てくるのか”に意識を集中させることができたと考える。また、カードを見せ、子どもたちが動物の名前を答えたら、間髪を入れずに「どんな鳴き声？」と質問することで、子どもたちは鳴き声の真似をより意識することができたと考えている。

B幼稚園における“動物になる活動”は、前回（A幼稚園での活動）よりも、より円滑に活動でき、かつねらいの達成についても改善されたと考える。しかし、「②教職員からのリフレクション」にもあったように、子どもたちが、裏声をはじめ、どこまでいろいろな声に“気付けたか”については、再考の余地がある。「動物の真似をしたら、面白い声が出たね」などの言葉で、子どもたちが“動物の真似”から離れて、自分の出している声に耳をかたむける時間を持ち、裏声をはっきり認識することができたのではないかと考えられる。この点は、指導の構成の在り方についての反省点としたい。

以上に加えて、B幼稚園では、第1回目の指導から、裏声での歌唱を実践した。A幼稚園での指導で、子どもたちが裏声を出す様子から、裏声での歌唱も十分可能ではないかと推察したからである。楽曲は、譜例1のわらべ歌を使用した。曲集等に掲載されている楽曲（通常の園活動で使用される曲）は、頭声と胸声を1曲の中で切り替えながら歌唱しなければならない。しかしこれは、幼児にとっては難しいと認識していたので、今回の指導では頭声の音域だけで歌唱することのできる曲を選択する必要があった。そこで、ほとんど音の上下動がないわらべ歌に着目し、使用することとした。

歌唱については、ほぼ全員の子どもが裏声で歌唱することができたが、音程については、ばらつきが出た。指導は3つのクラスで3回同じ内容で実施した。そのうち、筆者が全体の歌声を聴き、4割から5割程度の子どもがある程度近い音程で歌えていたと判断したのが2クラス、7割から8割くらいの子どもが歌えていたと判断したのが1クラスであった。なぜこのような差が生じたのかは、現時点ではわかっていない。また、正確な人数は把握できていないが、譜例1のわらべ歌を歌った際、 Re^5 からではなく、1オクターブ高い Re^6 から歌いだした子どもが目についた。これは、以前に実験的におこなった幼児への歌唱指導でも見られた現象と同じであった⁴⁾。これらの結果については、指導全般にわたって、裏声を出させるために、「高い声で（動物の鳴き声を）真似してみよう」、「どこまで高い声が出るかな」などの声かけをしていたのが一つの原因であろう。しかし、それ以外にも、幼児の音の感じ方、歌唱の際の音高の感じ方に、なんらかの原因があるように推察する。この問題については、頭声発声での発声指導と、頭声発声での歌唱経験を積んでいけば解消すると仮説を立てているが、今後も発声はもちろん、音程についても注視して研究をおこなっていくこととする。

（2）教職員からのリフレクション

- 筆者の声を聞いて、真似して、きれいな声が出せていた。しかし、ねらいの「気づく」よりも、動物の真似を楽しんでいたと思う。
- 汽笛の「ポッポー」という真似では裏声を出していたが、「線路は続くよどこまでも」に合わせて汽車のようにつながると、汽笛の真似よりも、“つながって楽しい”ほうに子どもたちが興味を持っていた。

- 初めての声の出し方に興味を持って参加する子どもの姿も多くみられ、裏声のまま歌を歌ってみたり、楽しく取り組めたと感じた。
- 汽車になる活動は楽しめていた。しかし、最初（の回）は汽車になって動く、次の回はそれに汽笛を入れる、その次は曲の途中で、止まる、進むを付け加えるなど、活動に少しずつ変化を持たせたほうが、子どもたちは飽きずに活動が続けられるのではないかと考える。

V. 今後の展望

本時において、ねらいである“子どもが楽しんで裏声を出す”という項目については、概ね達成できたと思う。次回の実践に向けては、今回の指導との連続性を保持しながら、指導計画を立案したい。なお、その際、ねらいが遊びの中心の項目（本時であれば、裏声を出すことが全体の活動の中で、最も面白く、興味を惹かれるもの）となるように留意していきたい。また、子どもの声に対する“気付き”を促すことも、重要な事項として指導に反映させたい。

歌唱については、4歳児でも、裏声で歌唱できることを確認できた。については、教材を工夫しながら、まずは裏声だけで歌う活動を始めていきたい。なお、先述の通り、子どもが裏声で歌唱する際、本来の音よりも1オクターブ高く出してしまう現象についても再確認した。ねらった音程で歌唱できる力を身に付ける方法についても検討していくこととする。

もちろん、教育要領や保育指針等で解説されているように、保育現場での歌唱活動は、正しい音程や発声で歌うことが本来の目的ではない^{5) 6) 7)}。しかし、音楽は、決まった音程、リズムなど、ある程度の精度で楽譜をたどれなければ、本質的な楽しみを味わうことは難しい。さらには、曲の美しさを感じ取り、表現し、歌唱を通じて一体感や達成感を高めていくためには、ある程度正確に歌う技術や柔らかく美しい歌声は必須であると考えられる。

子どもたちが、きれいな声が出せたことや上手に歌えたことを実感した時、思いのままに声を出し、歌っていた時とは全く異なる達成感を得ることができる。そしてその達成感が、有能感すなわちコンピテンスにつながり、表現活動をより深く、豊かにしていくものと考えられる。

今後も、子どもたちの成長や発達に丁寧に関わりながら、保育現場にとって有意義な歌唱メソッドを構築できるよう、研究を進めていくこととする。

なお、本研究は JSPS 科研費 JP19K02665（基盤研究C）の助成を受け、実施している。

注・文献

- 1) どなり声での歌唱の3つの問題点、先行研究と音楽技術指導の整備の遅れについての詳細は、次を参照。
長川慶（2017）：幼児の歌唱活動における問題点と指導のあり方 ― 新しい歌唱指導法の開発にむけての基礎研究 ―，保育文化研究，第5号，85-98.
- 2) 頭声発声を推奨する考えについての詳細は、次を参照。
長川慶（2013）：児童に対する発声指導についての ― 考察 ― 基本となる発声についての考え方とその指導法 ―，新潟中央短期大学紀要 暁星論叢，第63号，79-108；長川慶（2018）：幼児への発声指導の実践と考察 ― 頭声発声の有用性に着目して ―，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，第17号，187-194.
- 3) 長川慶（2018）：幼児への発声指導の実践と考察 ― 頭声発声の有用性に着目して ―，岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要，第17号，191.
- 4) 長川慶：前掲書，191.
- 5) 文部科学省（2018）：幼稚園教育要領解説，230.
- 6) 厚生労働省（2018）：保育所保育指針解説，280.
- 7) 内閣府・文部科学省・厚生労働省（2018）：幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説，291.